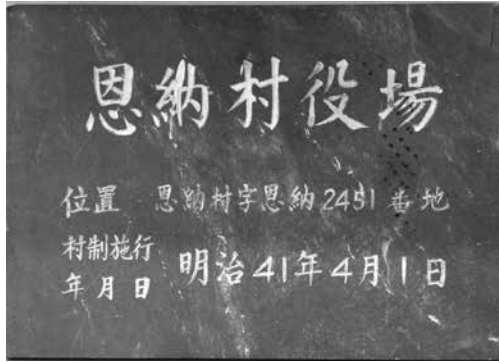


村制百十年

今年は恩納村制110年目です。今回はおさらいも兼ねて、恩納村が生まれた経緯、ムラの変遷をご紹介いたします。

恩納間切の創設

間切とは、明治41年3月まで使われていた、今でいう市町村と同じようなものです。『球陽』という資料に「金武郡内の四邑亦読谷山の八邑を将て、合して恩納郡と為し、始めて向弘毅（大里王子朝亮）・



村制施行日の入った旧役場庁舎の石版
(村役場所蔵)

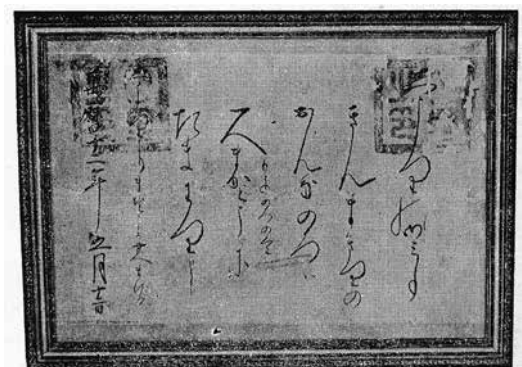


仲間節の碑（名嘉真）

毛国瑞（佐渡山親方安治）に賜ふ。」という記録があります。1673年、金武間切から四つのムラ、読谷山間切から八つのムラを分けて、恩納間切は創設されました。分けられたムラについて『南島風土記』では金武間切からは名嘉真、安富祖、瀬良垣、恩納の四か村、読谷山間切からは谷茶、富着、仲泊、久良波、読谷山（のちの山田）、真栄田、塩屋、与久田の八か村と記されています。

仲間節に「仲間（現在の名嘉真）からかいて久志辺野古までも 金武の御前がなし おかけ親島」とあることから、名嘉真がもともと金武間切の村だったことがわかります。また、実物は残っていませんが、恩納ノ口の辞令書の写真が残っており、これに「金武間切のおんなのろ」とあります。

恩納間切は国頭のムラと中頭のムラの統合によって生まれたため、現在の恩納村でも北部と中南部の



恩納ノ口の辞令書 万暦12（1584）年

文化が継承されており、また、恩納と谷茶の間には文化的な境界があるといわれています。

恩納間切のムラ

恩納間切が創設された時には12のムラでしたが、それぞれのムラも様々な変遷を遂げています。間切創設前の「絵図郷村帳」という資料には金武間切のムラに「中間村」「あふそ村」「せらかち村」「おんな村」が見られ、読谷山間切のムラに「たんちや村」「上ふづき村・下ふづき村」「中泊村」「古読谷山村」「くらは村」「前田村」「しほや村」「よくだ村」「当時無之」「きんはま村」「当時無之」が見られます。現在はない地名があったり、逆に現在の地名が載っていないかあったりします。これは集落の移動や合併、分離、また行政的な事情などが考えられます。